信毎歌壇

米川千嘉子選

越後から移住せし人の「佐渡おけさ」昭和のわが
（長野市）せきたつお

家の田植えなつかし
（上田市）小林さよ子

喪を済ませ会計に行きし病院の寂しさ忘れず夫逝き十年
（中野市）小林かつ子

歩けない友の家にて嫗三人トランプ、ゲーム、演歌を唄ふ
（佐久市）水間喜美子

風船が対抗措置に使われるかわいい玩具の思い出消すな
（木曽町）新村　亮三

転勤の父と一緒に転校す母の位牌とひよこを連れて
（小諸市）尾沼美枝子

娘がくれし臙脂の財布傷みても生涯替へることないだらう
（須坂市）北沢かず子

摘果する脚立の上に仰ぐ空りんご畑を青葉の風吹く
（宮田村）小田切孝子

新聞の誤植見つけて友の言う「ある、ある、だって人間だもの」
（御代田町）柳沢　光雄

入選の褒美にハガキ送られて倒れたところ助け起こさる
（長野市）近藤　光子

新しいポックリそっと置かれありかの少女の日元朝の枕辺

佳作

若き日に勤めし園のT君の叙勲のニュースの努力経し貌
（佐久市）篠原　敬子

短命の家族の分まで長く生き夏至の今日吾九十六歳
（小諸市）篠原　昭枝

選評　第一首、さまざまな人が手伝っての田植え。当時「佐渡おけさ」を歌った越後の人もすっかり信濃の人になったか。第二首、長い闘病で作者も足しげく通った病院。上句の具体的な場の提示がリアルで切ない。第三首、デイケアセンターなどに通わなくても、自分たちでいろいろにできる。いかにも楽しそう。第四首、北朝鮮が韓国へゴミなどを付けた風船を飛ばした。夢ある風船のイメージを壊す。

小池　光選

古びたる本にはさまれ現れた新聞の文字のなんと小さき
（長野市）北沢　京子

もう水ものどを通らぬ病床の父手を広げ我抱く強く
（小諸市）池田　真弓

断崖の細きピトンに我が命懸けて登りぬ木曽駒ヶ岳
（長野市）窪川　志郎

人間の親子のように散歩して犬の親子のように夫と眠りぬ
（長野市）伊藤　恵子

指先に鰯を捌く血が付いてタベの厨雨音激し
（小海町）依田　久代

一分もかからず餘部鉄橋を過ぎてわが夢ひとつ叶ひぬ
（長野市）原田　浩生

語らざる人生ドラマありぬべし待合室に患者ひしめく
（小諸市）星野　直人

一ヶ月の入院終へて帰り来し夫としみじみ月光を浴ぶ
（長野市）近藤　光子

蕗の出る山路を我は知っている熊が来ぬうちそそくさと採る
（長野市）松本　博人

雨の日は神があたふる農休み農具をすてて山の湯へゆく
（上田市）甲田　隆登

佳作

友逝きて心の隙間埋めなんとただひたすらに農機具を操る
（長野市）塚田志津子

花の道ひたすら求むる友逝きて紙のはさみを棺に納む
（宮田村）小田切孝子

選評　第一首、昔の新聞の活字は本当に小さい。昔の人はよくこんな小さな字が読めたものだと思う。意外な発見のある歌。第二首、いよいよ最期の迫った父。黙ってわたしを抱きしめてくれた。これ以上の愛情表現はないだろう。第三首、若き日の登山の思い出。断崖のピトンにすべてをかけて登る。きびきびしたリズムがこころよい。第四首、とてもおもしろい歌。

小島　なお選

お六櫛継いだ心と共に折れアロンアルファで接げる心も
（茅野市）三好　碧

遺言書と認めてくれた書記官が「お気をつけて」と地裁出るとき
（長野市）せきたつお

焼酎の大きなボトルに水を入れお酌する如茄子の水やり
（中野市）増田きみ江

駅裏のビル〈占〉と窓にあり旅の途中の迷い生れる
（大町市）平林　幸

蟻踏まぬよう歩くとう写真家が泣く人々を戦争に撮る
（上田市）矢島　美穂

いまだ出ぬ馬鈴薯の芽待ちしひと月の時空を思う今日の記念日
（小川村）稲葉　利郎

コミュ英のちょーぜつ難問さらり解きガバッと机に伏す留学生
（千葉県成田市）清水　洋子

この辺に一株あったと草刈らずホタルブクロが咲いて梅雨入り
（御代田町）柳沢　光雄

初任地の上司と友の顔浮かび鼻ねてあぜん　その地は更地
（飯綱町）羽入田弥山

筍は斜に立てかけた戸のガラス破りて伸びる天を目指して
（松本市）伊勢ちより

佳作

商品の勧誘ありて断れば受話器の向かう口調変はりぬ
（飯綱町）坂井　寿男

歯科医院治療二時間八十半ばゆまりを二回そっと申し出
（長野市）河口　武矩

選評　第一首、譲り受けて大事にしていたものだろう。櫛も櫛に宿る心も折々の修復と手入れが大切。第二首、遺言書が検認され、これから相続の手続きへ。去り際の「お気をつけて」が妙に気にかかる…。第三首、「大きなボトル」のたっぷり感がいい。大事な茄子様を接待する心持ちで。第四首、さびれた場所にこそ当たりそうな気配が漂う。何ということのない景色にも旅の心は吸われてゆく。